

放射性物質から防護されなかった 福島県の子どもたち

自主避難者・高校教員
宍戸俊則

1 テーマ

メインテーマ

福島県の学校は
子どもを放射性物質から守ろうとしたのか？

サブテーマ

- ・福島県中通りでの放射性物質への注意喚起はあったのか？
- ・マスメディアは適切に事故情報を報道してきたのか？
- ・事故発生直後の放射性物質への防護呼びかけは
充分だったのか？
- ・避難指定は適切なものだったのか？

2 原発事故が発生した2011年春の 福島市内の県立高校の対応

テレビや新聞で報道されていることと、全く違う

教員への実質的な禁止事項

- ・被曝を減らすように呼びかけること
- ・生徒の被曝を減らす工夫を行うこと

教員への制限事項

- ・原発事故のことを話題にすること

3 福島県という地域の概況の確認

歴史的にもバラバラな土地を明治時代に人為的に接合した県
県全体でまとめることが困難だった地域

- 浜通り 太平洋に面する地域 原発事故の現場
避難指示が出た地域のほとんどを含む
交通開発も遅れ、エネルギー産業に頼ってきた
- 中通り 福島市や郡山市があり、福島県内政治の中心
東北新幹線や東北自動車道が通る交通運輸の中軸
- 会津地方 西部にあり、江戸時代には独立した地域
他の2地区に比べて標高が高く降雪も多い

4 原発事故発生前の福島県

- **浜通り** 相馬地区・双葉地区・いわき地区
(南相馬市は相馬と双葉にまたがる)

- **中通り**

福島市周辺・郡山市周辺・白河市周辺

- **会津** 会津若松市周辺・南会津地区

→江戸時代の領主もバラバラ(一部は天領)

戊辰戦争時も狭い地域のなかで、細かく官軍と幕府軍に分かれた

県全体をまとめることが今でも困難

5 福島県内の学校教育の状況

- 私立の学校と生徒は、ごく一部
- 小中学校のほとんどは市町村立の公立学校
 - 地域住民や保護者の声を
市町村教育委員会を通して反映しやすい
 - マスクや長袖長ズボンを着用しての登下校を
呼びかけた
- 高等学校のほとんどは福島県立学校
 - 福島県と県教育委員会の意志が直結
 - 保護者の声よりも、福島県の方針が優先された

6 原発事故発生直後の政府による 避難指示区域拡大

第1原発から半径3km→10km→20km

ごく一部を除いて、すべて「浜通り」に区分される地域
避難指示に対する

福島県庁幹部と浜通り自治体首長の反応

事前協議も無く、役場へ通知ではなくメディアで指示
事態の深刻さや重大性に関する地元の知識不足

→国の指示・指定に対する大きな不満と反感

→避難指示自治体から政府への現在の不信に繋がる

7 中通り・会津地方の市町村の状況

自治体の内外から避難者を受け入れる立場

地震で自治体内に被害が発生

→大地震が発生しにくい地域という油断

→事前準備がない避難者受け入れ対応で
手一杯

→避難者の要求に応じて、予定外の避難所
を開設

→財政裏づけの準備も無く、自治体職員の
被災もある中で対応

8 県内自治体の一般的な状況

自治体が計画して

避難や防護措置を採る立場には立てなかった

- 避難を一方的に強制された自治体
- 避難者を突然受け入れることになった自治体
- 避難指示情報、避難者受け入れ情報が
国や県や避難元自治体から入らない自治体

9 福島県庁の対応

福島県庁自体が地震で損傷

→庁舎内部に設置予定の災害対策本部が
設置できない

→隣接する自治会館ビルに

臨時の福島県災害対策本部を設置

? 通信インフラが整備されておらず、情報収集
も伝達も不全(当初は携帯電話2回線だけ)

? 原発事故の意図的な過小評価?

10 福島第1原発1号機爆発

爆発をテレビ局・新聞社はすぐに把握したが、
国民には発表せず
→新聞・テレビの記者・社員は、全国メディアも
地元メディアも業務命令で浜通りから全員避難
現在も福島県内では避難の事実が報道されていない
地元新聞社もテレビ局もラジオ局も、
避難発令を認めていない
目の前からマスコミが消えていった
いわき市民や南相馬市民は理解している

11 1号機爆発の翌日 3月13日

福島県内のテレビ・ラジオ・新聞で

「絆」「復興」「頑張ろう」などのスローガン反復
例「災害に負けずがんばろう福島」

『福島民友』3月13日朝刊1面

参考

『河北新報』（宮城県仙台市を本社として
東北全体を販売範囲）

「難局をともに乗り越えよう」

メッセージ紙面掲載は3月20日

12 3月14日福島第1原発3号機爆発

「住民への健康影響なし」と発表するように、

福島県庁が東京電力に要望
(東京電力テレビ会議の記録による)

→東京電力が日本政府に相談

→「健康影響なし」の発表は実施されなかった

電力会社よりも、福島県庁が安全宣伝を要求

13 3月14日福島県庁・教育庁決定

中通りと会津地方の福島県立高校の合格発表
「3月16日正午に実施する」

3号機爆発でも決定変更せず

3月15日の大規模な汚染拡大も無視

→20 μ Sv/h超の汚染が福島市を襲っても変更
せず

この時期、福島県内の放射線科の医師が

30km以外には影響なしとメディアで反復宣伝

14 福島県立高校の合格発表と 合格証書伝達の方法

屋外に合格者の受験番号一覧を掲示して伝える
合格者は登校、合格通知や入学関係書類を受領
制服の採寸を受けなければならない

(多くの高校が当日、校舎内で採寸)

学力検査の点数開示も本人限定で、

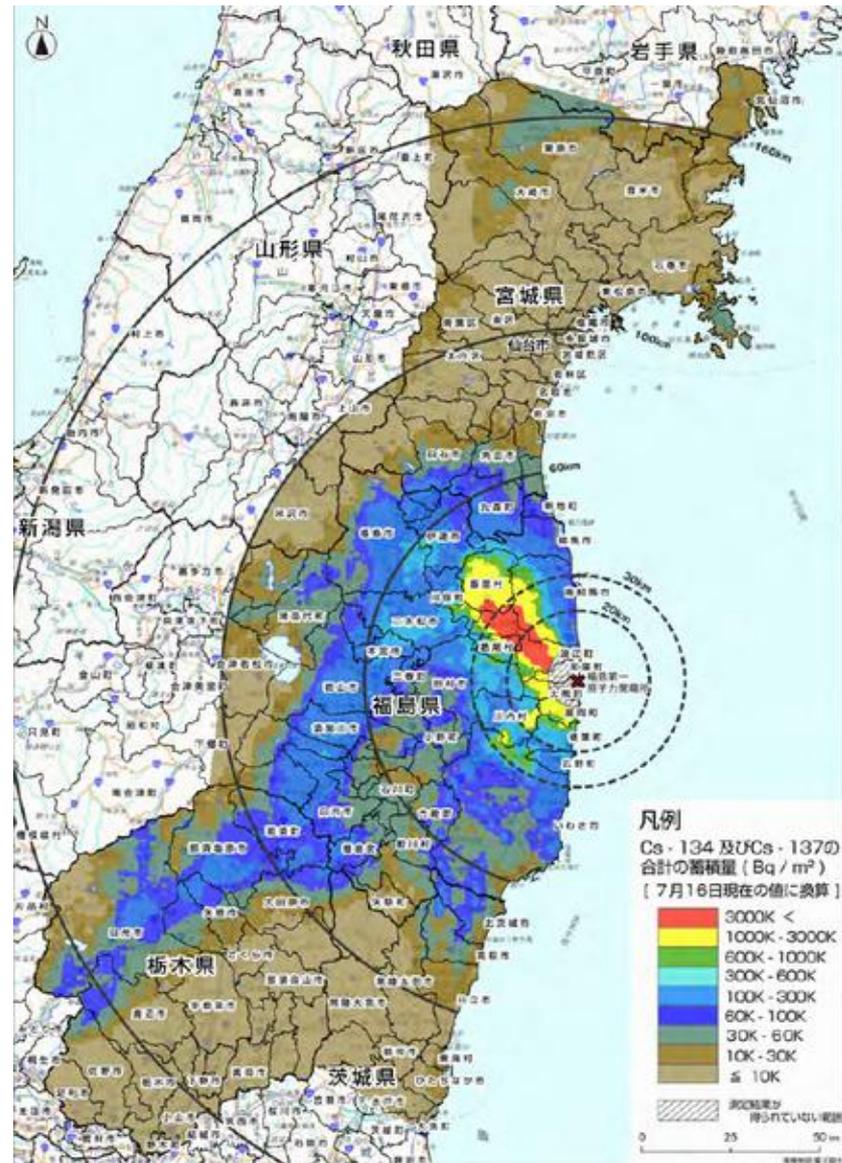
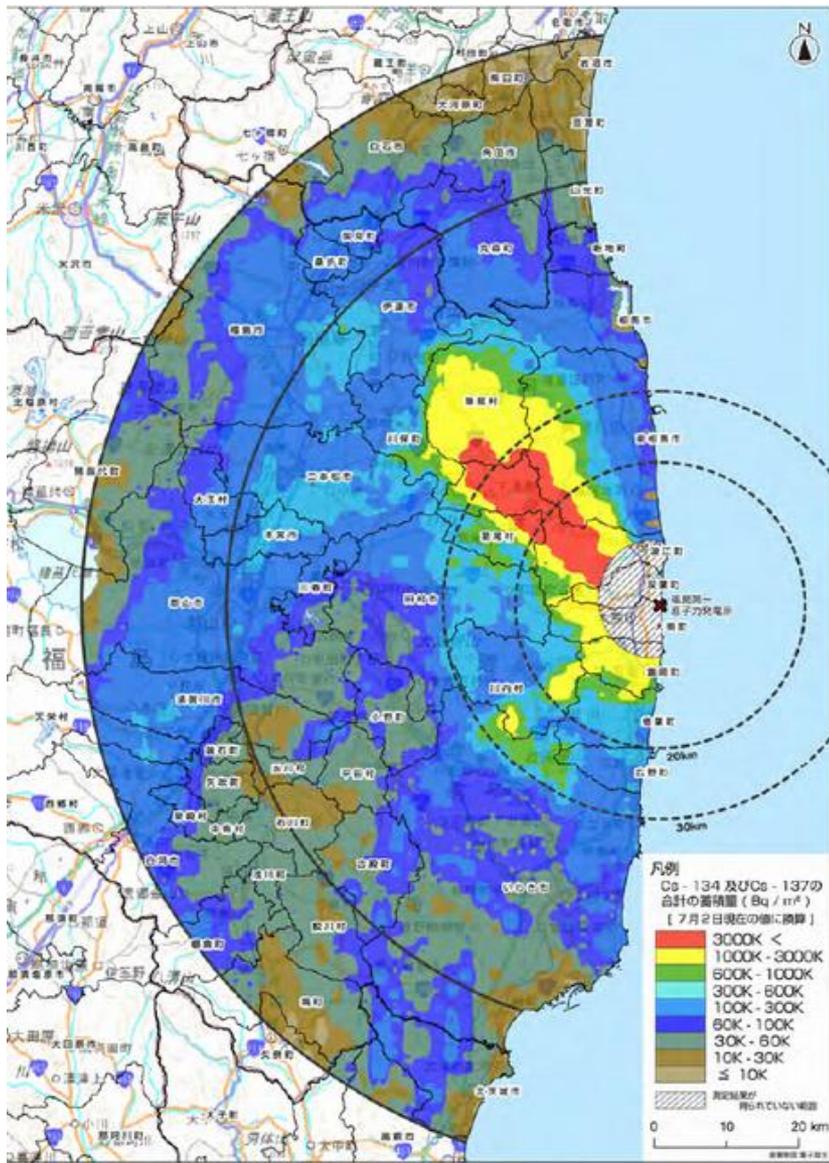
多くが合格発表当日開示を受ける

受験者多数が、保護者同伴で合格発表を見に来る

在校生の多くが合格者に対する

部活動の勧誘の為に登校

多数の人間が長時間屋外にいる必要がある



平成23年8月30日文部科学省による放射線量等分布マップ(放射性セシウムの土壌濃度マップ)の作成結果を踏まえた航空機モニタリング結果(土壌濃度マップ)の改訂について より抜粋

15 3月16日合格発表前の職員会議

例年通りに合格発表を実施する方針で

会議を続ける管理職

再検討を要求する提案をする、非理科系の教員

再考する余地がないかどうかの確認

→「県の決定なので実施」

何らかの配慮や注意喚起ができないか提案

→却下

理科教員による安全・安心説明

学校長による実施宣言

16 県立高校合格発表実施

何の警告もなしに行われた

→放射性物質を含む雨と雪を

無警戒で浴びてしまった

被曝した人々

受験者・保護者家族・高校生・教職員、

受験生を応援に来た塾教員、地元メディア

人間の被曝に関して、計測は行われなかった

17 福島県にやってきた「専門家」の 「アドバイス」 1

長崎大学山下俊一氏、高村昇氏、
広島大学神谷研二氏

(2011年3月19日県のアドバイザーに任命)

- ・年100ミリSvまでの被曝では健康に影響しない
- ・政府が何の警告も出していない原発から
半径30kmの外では、事故に関係なく
通常通りの生活をして問題はない
- ・今回の事故では、放射性ヨウ素により、
もしかしたら小児甲状腺癌がごく少数
増加するかもしれないが、他の健康影響は出ない

18 福島県にやってきた「専門家」の「アドバイス」2

- ・チェルノブイリ原発事故でも、
収束作業員が30人前後死んだ他には、
5年以上経過してから小児甲状腺癌が増えただけ
- ・小児甲状腺癌は、軽微な手術で対応でき、
QOLも下がらない
- ・放射線被曝で遺伝的影響が出ないことは、
広島や長崎のような大量の被曝死者が出た事例で
確認済
- ・これらは世界的な科学の常識
- ・それを超える健康影響が出ると語る人は不安を煽っている

19 県立高校の屋外部活動の再開

公的には山下俊一氏が繰り返し語った100mSv/y基準だけ
空間線量は3月21日講演で語った100 μ Sv/hが子どもの基準
屋外部活動の顧問は保護者から

「山下氏の言葉を理解した」という内容の承諾書を集めた
3月末には福島市内の屋外運動部活動が再開
時間制限も手洗いやうがいの励行も帰宅時の入浴も助言無し
→指導者や教員が自発的に防護させるしかない
指導者や教員が防護措置を採らずに高校生を被曝させる例
「体力と根性で放射性物質に負けない体ができる」の発言も

20 鈴木寛文部科学副大臣（当時）の 政府事故調への聴取での虚偽証言

「ALARAの原則の教育現場への徹底」をしたと供述
教育現場の実際

→被曝低減の注意喚起も防護措置も無かった
国・文部科学省・福島県庁・県教育委員会

→防護呼びかけをしない
高校の教室の窓を閉めていたのは、
学校や教員の自主判断

2011年7月まで防護を高校の現場で、生徒一般の
注意事項として、指示伝達されたことはない。

21 中通りと会津地方の学校再開

4月 中通りと会津の小中高校の授業は再開
学校施設、通学路、路肩、校庭などの安全性は
確認されなかった
小学校中学校では保護者の強い要望が
限定的に反映された
登下校時はマスク着用 屋外活動は当面自粛
「科学的な根拠」や「専門家のアドバイス」ではなく
理由は、保護者の要望
県立高校では
体育授業がしばらく屋外で実施されなかっただけ
登下校のマスク着用も呼びかけられなかった
通学時の吸気被曝のリスクは無視

22 福島県の学校が2011年に 屋外活動を自粛した理由

例：屋外プール授業実施を自粛

子どもの被曝回避が目的ではなかった
下流住民からの汚染賠償請求を回避する目的
プールの水の放出の判断

→福島県は学校長に丸投げした
「付近住民からの賠償請求には県は応じない」と
福島県庁が通達

→学校単独では賠償不能

→プール掃除ができないので自粛

23 2011年の福島県の課外の 体育活動(運動部の練習)

4月から警戒も警告もなく屋外練習と試合が行われていた
運動施設は、一部の私立学校所有のものだけ除染済み

マスコミは課外活動での被曝防護に関する話題を

取材もしない、報道もなし

学校側も福島県外マスコミの取材を拒否

例外的に防護していた一部の団体だけが

県外の取材を受け入れた

→福島県の学校や競技団体が被曝防護を行なうという誤解

→福島県庁もその誤解を利用し、防護した振り

24 被曝防護に関する通知

福島県高等学校体育連盟の通知文

「高体連各種大会参加に関わる放射線等の対応について」

平成23年4月26日

<http://www.fukushima-koutairen.jp/img/housyasen-20110701-01.pdf>

- ①屋外競技では放射能測定値が毎時3.8 μ シーベルト以上の会場の使用を控える。(使用する場合は1時間以内とする。)
- ②毎時3.8 μ シーベルト未満の会場については平常通りの活動を行って差し支えない。大会や練習の参加については保護者の同意を得て行う。

25 屋外運動での防護の実際(1)

通知文が出たのは高体連地区大会開催直前
それまでの練習では防護の呼びかけはなく、
注意事項もなし

(通知文から引用)

※競技・練習での留意点

手や顔を洗い、うがいをする。

土や泥を口に入れない。

靴や着衣のほこりを落とす。

26 屋外運動での防護の実際(2)

通知文が出るまでは、高校の運動部の基準は

100 μ Sv/h

根拠は福島県のアドバイザーの講演(3月21日)

通知文が出る以前、一ヶ月の屋外練習が、

防護措置なし、時間無制限で実施済

一か月分の被曝に関しては、何の言及もなし

除染された運動場は一部の私立高校のみ

大会も実際には3.8 μ Sv/hを超える会場で実施された

競技中の待機所の線量は計測さえもされなかった

27 結び

法律による被曝防護の権利を獲得できていない
子どもたちは放射性物質から防護されていない
大人たちは子どもたち以上に防護されていない
被曝防護の姿勢さえも採る事を許されていない

被曝の実態に関する調査も行われていない
→被曝防護の権利を人々が持つ確認から

穴戸俊則 参考文献リスト

| 文獻名 | 著者 | 発行年月日 | 出版元等 |
|--|------------------|-------------|-------------------|
| 1 『原子が被曝日誌』 | 森江信著 | 1979年11月20日 | 技術と人間 |
| 2 『プルトニウムの恐怖』 | 高木仁三郎著 | 1981年11月10日 | 岩波新書(黄版)173 |
| 3 『原発症候群 アミックインフェルノ』 | 西山明著 | 1982年08月25日 | 批評社 |
| 4 『原発の経済学』 | 室田武著 | 1983年08月15日 | 朝日文庫 |
| 5 『村が消えた むつ小川原 農民と国家』 | 本田靖春著 | 1985年03月15日 | 講談社文庫 |
| 6 『原発への警鐘』 | 内橋克人著 | 1986年09月15日 | 講談社文庫 |
| 7 『われらチェルノブイリの虜囚』 | 高木仁三郎 水戸巖 反原発記者会 | 1987年04月15日 | 三一新書984 |
| 8 『そこに原発があるけれど』 | 柴野敬夫著 | 1988年10月10日 | あけび書房 |
| 9 『原発銀座・若狭から』 | 中島哲演著 | 1988年10月19日 | 光雲社 |
| 10 『朝まで生テレビ! 原発 是か?非か?』 | テレビ朝日 | 1988年12月20日 | テレビ朝日 |
| 11 『海と原子力発電所 漁民の海・科学者の海』 | 水口憲哉 | 1989年03月05日 | 農山漁村文化協会 人間選書135 |
| 12 『新版危険な話 チェルノブイリと日本の運命』 | 広瀬隆著 | 1989年03月29日 | 新潮文庫 |
| 13 『朝まで生テレビ! 原発2 文明の選択 繁栄か?破滅か?』 | テレビ朝日 | 1989年03月30日 | テレビ朝日 |
| 14 『図説 危険な話』 | コミックボックス編 | 1989年10月26日 | ふゅーじゅんふるだくと |
| 15 『チェルノブイリ報告』 | 広河隆一著 | 1991年04月19日 | 岩波新書(新赤版)168 |
| 16 『新版眠れない話 刻々と迫り来る日本の大事故』 | 広瀬隆著 | 1991年08月15日 | 新潮文庫 |
| 17 『放射線被曝の歴史』 | 中川保雄著 | 1991年09月20日 | 技術と人間 |
| 18 『悲劇が進む 新版四番目の恐怖』 | 広瀬隆 広河隆一共著 | 1991年10月15日 | 講談社文庫 |
| 19 『原発こ子孫の命は売れない 舟倉隆と棚塩原発反対同盟23年の戦い』 | 恩田勝陽亅著 | 1991年10月25日 | 七ツ森書館 |
| 20 『沈黙の未来 旧ソ連「核の大地」に行く』 | 広河隆一著 | 1992年02月20日 | 新潮社 |
| 21 『チェルノブイリの少年達』 | 三枝義浩著 | 1992年06月23日 | 講談社 |
| 22 『チェルノブイリから ニーナ先生と子どもたち』 | 写真・文広河隆一 | 1992年08月10日 | 小学館 |
| 23 『新版最後の話 死の灰と世紀末』 | 広瀬隆著 | 1994年01月25日 | 新潮文庫 |
| 24 『プルトニウムの未来』 | 高木仁三郎著 | 1994年12月20日 | 岩波新書(新赤版)365 |
| 25 『原発事故……その時、あなたは!』 | 瀬尾健著 | 1995年06月30日 | 風媒社 |
| 26 『新版 日本の原発地帯』 | 鎌田慧著 | 1996年01月15日 | 岩波同時代ライブラリー286 |
| 27 『チェルノブイリの真実』 | 広河隆一著 | 1996年04月10日 | 講談社 |
| 28 『決定版 原発大論争』 | 別冊宝島編集部編 | 1999年12月9日 | 宝島社文庫 |
| 29 『検証ドキュメント臨界19時間の教訓』 | 核事故緊急取材班十岸本康著 | 2000年01月01日 | 小学館文庫 |
| 30 『内部被曝の脅威 原発から劣化ウラン弾まで』 | 肥田舜太郎 鎌仲ひとみ著 | 2005年06月10日 | 筑摩新書541 |
| 31 『原発とプルトニウム バンドラの箱を開けてしまった科学者たち』 | 常石敬一著 | 2010年04月06日 | PHPサイエンスワールド新書017 |
| 32 『暴走する原発 チェルノブイリから福島へ これから起こる本当のこと』 | 広河隆一著 | 2011年05月25日 | 小学館 |
| 33 『福島原発メルトダウン』 | 広瀬隆著 | 2011年05月30日 | 朝日新書298 |
| 34 『原発のウソ』 | 小出裕章著 | 2011年06月01日 | 扶桑社新書094 |
| 35 『緊急解説! 福島第一原発事故と放射線』 | 水野倫之 山崎淑行 藤原淳登著 | 2011年06月10日 | NHK出版新書353 |
| 36 『福島原発の真実』 | 佐藤栄佐久著 | 2011年06月22日 | 平凡社新書594 |
| 37 『特別報道写真・解説集 いま原発で何が起きているのか』 | 北海道新聞社 | 2011年06月26日 | 北海道新聞社 |
| 38 『エコノミスト臨時増刊2011年7月11日号 ノーモア!フクシマ 福島原発事故の記録』 | 毎日新聞社 | 2011年06月27日 | 毎日新聞社 |
| 39 『河北新報特別縮刷版 3・11東日本大震災1ヶ月の記録』 | 河北新報社編 | 2011年06月27日 | 竹書房 |
| 40 『ルポ東京電力原発危機1ヵ月』 | 奥山俊宏著 | 2011年06月30日 | 朝日新書302 |
| 41 『新版 チェルノブイリ診療記 福島原発事故への黙示』 | 菅谷明著 | 2011年07月01日 | 新潮文庫 |
| 42 『放射線・放射能がよくわかる本』 | 多田順一郎著 | 2011年07月10日 | オーム社 |
| 43 『原発はいらない』 | 小出裕章著 | 2011年07月15日 | 幻冬社ルネッサンス新書044 |
| 44 『原発を終わらせる』 | 石橋克彦編 | 2011年07月20日 | 岩波新書(新赤版)1315 |
| 45 『報道災害【原発編】事実を伝えないメディアの大罪』 | 上杉隆 鳥賀陽弘道著 | 2011年07月30日 | 幻冬新書221 |
| 46 『福島 原発と人びと』 | 広河隆一著 | 2011年08月19日 | 岩波新書(新赤版)1322 |
| 47 『「原発」国民投票』 | 今井一著 | 2011年08月22日 | 集英社新書0603A |

穴戸俊則| 参考文献リスト

| | | | | |
|----|---|---|-------------|------------------------|
| 51 | 『原発訴訟』 | 海渡雄一著 | 2011年11月18日 | 岩波新書(新赤版) 1337 |
| 52 | 『プルトニウムの発電の恐怖2 フクシマの過ちを繰り返さないために』 | 小林圭二 西尾漢編著 | 2011年12月08日 | 創史社 |
| 53 | 『原発のコスト エネルギー転換への視点』 | 大島堅一著 | 2011年12月20日 | 岩波新書(新赤版) 1342 |
| 54 | 『放射能列島 日本でこれから起きること 誰も気づかない環境被害の現実』 | 武田邦彦著 | 2011年12月30日 | 朝日新書331 |
| 55 | 『原発危機と「東大話法」 傍聴者の論議・欺瞞の言語』 | 安富歩著 | 2012年01月15日 | 明石書店 |
| 56 | 『官邸から見た原発事故の真実 これから始まる真の危機』 | 田坂広志 | 2012年01月20日 | 光文社新書558 |
| 57 | 『検証福島原発事故・記者会見 東電・政府は何を隠したのか』 | 日隅一雄 木野龍逸著 | 2012年01月20日 | 岩波書店 |
| 58 | 『原子力災害に学ぶ放射線の健康影響とその対策』 | 長瀬重信著 | 2012年01月20日 | 丸善出版 |
| 59 | 『福島からあなたへ』 | 武藤類子著 | 2012年01月20日 | 大月書店 |
| 60 | 『ドキュメント福島第一原発事故 マルトダウン』 | 大鹿靖明著 | 2012年01月27日 | 講談社 |
| 61 | 『内部被曝から命を守る なぜいま内部被曝問題研究会を結成したのか』 | 市民と科学者の内部被曝問題研究会編著 | 2012年02月10日 | 旬報社 |
| 62 | 『いのちと責任 対談高史明対談高橋哲哉』 | 李孝徳編 | 2012年02月20日 | 大月書店 |
| 63 | 『福島第一原発 真相と展望』 | アーニー・ガンダーセン著 岡崎玲子訳 | 2012年02月22日 | 集英社新書0628B |
| 64 | 『メディアの異 権力に加担する新聞・テレビの深層』 | 青木理、神保哲生、高田昌幸著 | 2012年02月25日 | 産学社 |
| 65 | 『新聞・テレビはなぜ平気で「ウソ」をつくのかわ』 | 上杉隆著 | 2012年02月29日 | PHP新書786 |
| 66 | 『新聞・テレビはなぜ平気でウソをつくのかわ』 | 上杉隆著 | 2012年02月29日 | PHP新書786 |
| 67 | 『第二のフクシマ、日本滅亡』 | 広瀬隆著 | 2012年02月29日 | 朝日新書339 |
| 68 | 『3・11複合被災』 | 外岡秀俊著 | 2012年03月06日 | 岩波新書(新赤版) 1355 |
| 69 | 『DAYS JAPAN 4月増刊号 検証 原発事故報道 TV・新聞・ツイッターそして検証報道』 | 広河隆一監修 | 2012年03月09日 | DAYS JAPAN 2012年4月号増刊号 |
| 70 | 『レベル7 福島原発事故、隠された真実』 | 東京新聞原発事故取材班著 | 2012年03月11日 | 幻冬社 |
| 71 | 『僕と日本が震えた日』 | 鈴木みそ | 2012年03月15日 | 徳間書店RYU COMICS |
| 72 | 『浜岡 ストップ！原発震災』 | 東井惺著 | 2012年03月25日 | 野草社 |
| 73 | 『報道記録集 東日本大震災・原発事故 福島の1年 2011.3.11～2012.3.11』 | 福島民友社 | 2012年03月25日 | 福島民友社 |
| 74 | 『チェルノブイリ原発事故がもたらしたこれだけの人体被害 科学的データは何を示している』 | 核戦争防止国際医師会議ドイツ支部著 松崎道幸監訳 | 2012年03月30日 | 合同出版 |
| 75 | 『百人百話 故郷ことどまる 故郷を離れる それぞれの選択』 | 岩上安身著 | 2012年03月30日 | 三一書房 |
| 76 | 『放射線リスクコミュニケーション 健康影響を正しく理解するために』 | 柴田義貞編集 | 2012年03月30日 | 長崎新聞社 |
| 77 | 『終りのない惨劇 チェルノブイリの教訓から』 | ミシェル・フェルネクス ソランジュ・フェルネクス ロザリー・パーテル著 竹内雅文訳 | 2012年03月31日 | 緑風出版 |
| 78 | 『ガンセンター院長が語る放射線健康障害の真実』 | 西尾正道 | 2012年04月20日 | 旬報社 |
| 79 | 『報道の脳死』 | 鳥賀陽弘道著 | 2012年04月20日 | 新潮新書467 |
| 80 | 『福島原発事故 内部被曝の真実』 | 柴田義貞編集 | 2012年05月01日 | 長崎新聞新書024 |
| 81 | 『生命たちの悲鳴が聞こえる 福島の怒りと脱原発デモ』 | エイエム企画編 | 2012年05月22日 | エイエム企画 |
| 82 | 『「東京電力」研究 排除の系譜』 | 斎藤貞男著 | 2012年05月30日 | 講談社 |
| 83 | 『電通と原発報道 巨大広告主と大手広告代理店によるメディア支配の仕組み』 | 本間龍著 | 2012年06月26日 | 亜紀書房 |
| 84 | 『原発とは結局なんだったのか いま福島で生きる意味』 | 清水修二著 | 2012年07月20日 | 東京新聞 |
| 85 | 『封印された「放射能」の恐怖 フクシマ事故で何人がガンになるのか』 | クリス・バズビー著 飯塚真紀子訳 | 2012年07月25日 | 講談社 |
| 86 | 『検証 福島原発事故 官邸の100時間』 | 木村英明 | 2012年08月07日 | 岩波書店 |
| 87 | 『3.11後を生きる 今、いのちを守る』 | 片岡輝美著 | 2012年08月10日 | 日本キリスト教団出版局 |
| 88 | 『原発危機 官邸からの証言』 | 福山哲郎 | 2012年08月10日 | 筑摩新書974 |
| 89 | 『原発危機 官邸からの証言』 | 福山哲郎著 | 2012年08月10日 | 筑摩新書974 |
| 90 | 『この国は原発事故から何を学んだのか』 | 小出裕章著 | 2012年09月10日 | 幻冬社ルネッサンス新書063 |
| 91 | 『構造災 科学技術社会に潜む危機』 | 松本三和夫 | 2012年09月20日 | 岩波新書(新赤版) 1386 |
| 92 | 『正しく怖がる放射能の話 100の疑問Q&A改訂増補版』(第2刷) | 山下俊一監修 | 2012年09月20日 | 長崎文獻ブックレット01 |
| 93 | 『低線量汚染地域からの報告 チェルノブイリ26年後の健康被害』 | 馬場朝子 山内太郎著 | 2012年09月25日 | NHK出版 |
| 94 | 『東電福島原発事故 総理大臣として考えたこと』 | 菅直人著 | 2012年10月25日 | 幻冬社新書283 |
| 95 | 『原発難民』 | 鳥賀陽弘道著 | 2012年11月01日 | PHP新書831 |
| 96 | 『「海江田ノート」原発との闘争176日の記録』 | 海江田万里著 | 2012年11月02日 | 講談社 |
| 97 | 『高校教師かわはら先生の原発出前授業1 大事なお話 よくわかる原発と放射能』 | 川原茂雄著 | 2012年12月20日 | 明石書店 |

穴戸俊則| 参考文献リスト

| | | | |
|---|---|-------------|---------------------------|
| 101 『原発災害とアカデミズム 福島大・東大からの問いかけと行動』 | 福島大学原発災害支援フォーラム (FGF) × 東京大学原発災害支援フォーラム (TGF) | 2013年02月11日 | 合同出版 |
| 102 『今日もいい天気 原発事故編』 | 山本おさむ著 | 2013年02月12日 | 双葉社 |
| 103 『つくられた放射線「安全」論 科学が道を踏みはずすとき』 | 島園進著 | 2013年02月18日 | 河出書房新社 |
| 104 『「原発事故報告書」の真実とウソ』 | 堀谷喜雄著 | 2013年02月20日 | 文春新書900 |
| 105 『東日本大震災 伝えなければならぬ100の物語 第5巻 放射能との格闘』 | 川柳勝編集 | 2013年02月20日 | 学研教育出版 |
| 106 『被爆と被曝 放射線に負けずに生きる』 | 肥田舜太郎著 | 2013年02月25日 | 幻冬社ルネサンス新書068 |
| 107 『検証福島原発事故 記者会見 「収束」の虚妄』 | 木野龍逸著 | 2013年02月27日 | 岩波書店 |
| 108 『3・11とチェルノブイリ法 再建への知恵を受け継ぐ』 | 尾松亮著 | 2013年03月18日 | 東洋書店 |
| 109 『核の難民 ビキニ水爆実験「除染」後の現実』 | 佐々木英基著 | 2013年03月25日 | NHK出版 |
| 110 『首相官邸で働いて初めてわかったこと』 | 下村健一著 | 2013年03月30日 | 朝日新書397 |
| 111 『調査報告 チェルノブイリ被害の全貌』 | アレクセイ・V・ヤブロコフ ヴァシリヤ・B・ネステレンコ アレクセイ・V・ネステレンコ ナタリヤ・V・ネステレンコ | 2013年04月26日 | 岩波書店 |
| 112 『チェルノブイリ原発事故 ベラルーシ共和国非常事態省チェルノブイリ原発事故被害対策局編 日本ベラルーシ友交2013年05月20日』 | ベラルーシ共和国非常事態省チェルノブイリ原発事故被害対策局編 日本ベラルーシ友交2013年05月20日 | 2013年05月20日 | 産学社 |
| 113 『環境活動34の証言 3.11あの時 STAGE2012』 | 東北環境パートナーシップオフィス | 2013年05月31日 | 東北環境パートナーシップオフィス |
| 114 『これならできる原発ゼロ！市民がつくった脱原子力政策大綱』 | 原子力市民委員会編 | 2013年06月13日 | 宝島社 |
| 115 『父の約束 本当のフクシマの話しよう』 | 中手聖一著 | 2013年06月21日 | ミツバパブリッシング |
| 116 『福島と原発 誘致から大震災への50年』 | 福島民報社編集局 | 2013年06月30日 | 早稲田大学出版部 |
| 117 『ヒロシマからフクシマ 原発をめぐる不思議な旅』 | 鳥野龍逸著 | 2013年07月01日 | ビジネス社 |
| 118 『福島再生 その希望と可能性』 | 池田香代子 齋藤紀 清水修二著 | 2013年08月13日 | かがわ出版 |
| 119 『あなたを守りたい〜3・11と母子避難〜』 | 海南友子著 | 2013年08月17日 | 子どもの未来社ブックレットNo.002 |
| 120 『原子力 真の遺産 核のごみから放射能汚染まで』 | 北海道新聞社編 | 2013年08月28日 | 北海道新聞社 |
| 121 『原発依存国家』 | 『週刊SPA!』原発取材班著 | 2013年09月01日 | 扶桑社新書141 |
| 122 『美味しんぼ 110 福島の真実1』 | 雇屋哲 花咲アキラ著 | 2013年09月04日 | 小学館 |
| 123 『福島原発事故 福島県民健康管理調査の闇』 | 日野行介著 | 2013年09月20日 | 岩波新書(新赤版)1442 |
| 124 『福島原発事故 東電テレビ会議 49時間の記録』 | 福島原発事故記録チーム編 | 2013年09月27日 | 岩波書店 |
| 125 『福島原発事故タイムライン2011〜2012』 | 福島原発事故記録チーム編 | 2013年09月27日 | 岩波書店 |
| 126 『来るべき民主主義 小平市都道328号線と近代政治哲学の諸問題』 | 國分功一郎著 | 2013年09月30日 | 幻冬社新書315 |
| 127 『母親達の脱被曝革命〜家族を守る22の方法〜』 | お母さん革命ネットワーク著 | 2013年10月03日 | 扶桑社新書148 |
| 128 『原発事故と科学的方法』 | 牧野淳一郎 | 2013年10月04日 | 岩波科学ライブラリー216 |
| 129 『原発広告』 | 本間龍著 | 2013年10月08日 | 亜紀書房 |
| 130 『四大公害病 水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市公害』 | 政野淳子著 | 2013年10月25日 | 中公新書2237 |
| 131 『福島第一原発収束作業日記 3・11からの700日間』 | ハッピー著 | 2013年10月30日 | 河出書房新社 |
| 132 『原発の是非を問うこと、わたしたちがやるべきこと』 | 堀潤著 | 2013年11月05日 | わが子からはじまるクローンハウスブックレット013 |
| 133 『原発メルトダウンへの道 原子力研究会100時間の証言』 | NHKETV特集取材班 | 2013年11月15日 | 新潮社 |
| 134 『医学的根拠とは何か』 | 津田敏秀著 | 2013年11月20日 | 岩波新書(新赤版)1458 |
| 135 『人間なき復興 原発避難と国民の「不理解」をめぐって』 | 山下祐介 市村高志 佐藤彰彦著 | 2013年11月20日 | 明石書店 |
| 136 『母子避難、心の軌跡 家族で訴訟を決意するまで』 | 重松明希子著 | 2013年12月18日 | かがわ出版 |
| 137 『本当に役に立つ汚染地図』 | 沢野伸浩著 | 2013年12月22日 | 集英社新書0719B |
| 138 『食べる？ 食品セシウム測定データ745』 | ちだい著 | 2013年12月27日 | 新評論 |
| 139 『フクシマカタストロフ 原発汚染と除染の真実』 | 青沼陽一郎著 | 2013年12月30日 | 文藝春秋社 |
| 140 『反原発へのいやがらせ全記録』 | 海渡雄一編 | 2014年01月18日 | 明石書店 |
| 141 『アサツユ1991〜2013 脱原発福島ネットワーク25年の歩み』 | 脱原発福島ネットワーク編 | 2014年02月04日 | 七ツ森書館 |
| 142 『「放射能汚染地図」の今』 | 木村真三著 | 2014年02月27日 | 講談社 |
| 143 『検証福島原発事故 記者会見3 欺瞞の連鎖』 | 木野龍逸著 | 2014年02月27日 | 岩波書店 |
| 144 『東京を脱出してみたよ！脱出編』 | 元町真央著 | 2014年03月05日 | 小学館 |